LECTURE 講演会報告 大学

● メディアプロデュース学会主催
トークイベント「しをんの物語の世界」
● 小説家、随筆家 三浦しをん氏
● 10/20 長久手キャンパス

さる10月20日、メディアプロデュース学会のイベントとして、直木賞受賞の『まほろ駅前多田便利軒』や本屋大賞1位の『舟を編む』、最近映画化された『神去なあなあ日常』などで大人気の作家、三浦しをん氏をお招きして、トークイベントを行いました。講演会形式ではなく、壇上に上がった学生たちとのフリートークを中心に進行し、司会や会場整備などの全ての役割を学生たちが担当しました。先立ってスタッフの募集をしたところ、全学部から多数の応募が寄せられ、三浦氏の人気の高さがうかがえました。当日の来場者には他学部はもちろん、他大学の学生や社会人も少なくありませんでした。

今をときめく大作家であるにもかかわらず、三浦氏は気さくな口調で学生の質問に快く答えてくださり、小説を書く際に心掛けていることや、取材の苦労と面白さなど、興味の尽きないお話をしてくださいました。会場にはなごやかな笑い声が絶えることなく、三浦さんの飾らない人柄と小説に対する真摯な姿勢に、みんな魅了されました。メディアプロデュース学部には小説を書く学生も多く、良い刺激となり参考になったことでしょう。

● 第3回文学部（英文学科）講演会
「教養を身につけるための
英語教育」
● 東京大学教育学部教授
斎藤兆史氏
● 10/24 長久手キャンパス

「現在の英語教育では"実用英語、つまり"いかに円滑なコミュニケーションを取るか"を重視しています。文法や訳読をメインの学習方法としてきた"教養英語"を否定するような流れとも言えます。しかし、果たして英語教育において、教養は不要なのでしょうか？」と問いかけた斎藤先生。時代と共に変化する英語教育の環境や考え方を解説し「英語を学ぶこと」そのものへの考察を促していました。題材のひとつとして取り上げたのが、スヌーピーで知られるアメリカの漫画『ピーナッツ』。斎藤先生は「作中に描かれたユーモアを理解するためには、英語の文法に関する知識、語彙力、語用論的知識だけではなく、社会や文化、芸術、風習など幅広い教養が不可欠です」と説明し、この漫画のワンシーンに登場するイギリス小説の原書を訳読。学生たちは、豊かな教養と英語コミュニケーション能力の両方を身につけることが、国際社会、多文化社会で多様な人と対話し、交流を広げていく力になると学びました。

● ジェンダー・女性学研究所主催
第30回定例セミナー「国連やさま
ざまな国の中での女性」
● 国連ウィメン日本協会理事長
有馬真喜子氏
● 11/13 星が丘キャンパス

国連ウィメン日本協会理事長の有馬真喜子氏をお招きし、世界の女性の現状や同協会の活動についてお話しいただきました。

有馬氏は新聞記者やテレビのニュースキャスターとして活躍された後、1986年からはジャーナリストを本業に国内外の公職を兼任されています。

お話は今年ノーベル平和賞を受賞したマララさんがすべての人に教育を受ける権利をと訴えた講演の紹介からはじめられました。世界の女性たちが持つべき権利を奪われたり苦しめられたりすることがないよう活動する機関が国連ウィメンです。

日本女性と国連との関わりにも触れられました。有馬氏も取材された1975年の第1回世界女性会議での宣言を受けて各国で行われてきた具体的な取り組みが日本で最近よく聞く「女性の活躍推進」にもつながるとのこと。各種の指標が示す通り、まだまだ日本でも向き合うべき問題がありますが、状況は明らかによくなってきているそうです。

国連ウィメンの活動には若い女性たちも積極的に参加するようになり、例えば今年「ハリー・ポッター」に出演したエマ・ワトソンさんは、国連ウィメンの親善大使に任命されスピーチを行ったそうです。学生たちにも活動への参加を呼びかけられました。

● 都市環境デザイン専修講演会
「RAD榊原充大+本間智希」
● RAD – Research for Architectural Domain
榊原充大氏・本間智希氏
● 11/28 長久手キャンパス

RADとはResearch for Architectural Domainの略称で、自らを設計事務所ではなくリサーチ集団と称しています。その「リサーチ」の定義もユニークで、彼らによれば「建築的アイデアを生かす場所を見つけ、提案する、そのプロセス」の事だといいます。ではなぜ「リサーチ」するのでしょうか。大きくは次の2点に要約し得るでしょう。

1・建築設計のような専門分野に精通してくると、目の前の課題をとにかく「建築で」「空間で」解決しようとしてしまうが、建てる以外の解決策も提案し得るのではないか？

2・設計者へは通常、依頼者の方で「こうしたい」という与件を整理した上で訪れる。だが本当に困っている人は「何が問題か分からない」人ではないか？

例えば「堀川common」では、元々の「団地を改装するための作業員小屋をつくってくれ」という（だけの）依頼に対して、周辺エリアに住む新旧世代の乖離という潜在的なエリアの問題を洗い出し、それをつなげる為の提案―それは空間だけでなく、関わり方の仕組みづくりにも及んだ―まで行っています。その結果、今では住民が主体になって交流の場作りを継続できているそうです。

いわれた事に対してただ図面を描くだけでなく、問題点を洗い出し、だったらこうしよう、と構築的に提案する―これを建築的アイデアと呼ぶのならば、困っている人に寄り添い、一緒に解決策を見つけ行動することも、設計を学んだ人間が力になれる場所なのかもしれません。

LECTURE 講演会報告 大学

● 第4回文学部（教育学科）講演会
「いじめ問題の正しい理解と対応」
● 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 総括研究官
滝充氏
● 11/27 長久手キャンパス

「いじめ問題の正しい理解と対応」と題した講演が、滝充先生（文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター総括研究官）によって11月27日4限512教室で実施されました。滝先生によれば、いじめの増加が報じられるも、実状に大きな変化はなく、いじめは常に起きていると考えて対応する必要があるとのことです。暴力を伴わない仲間はずれ等のいじめについては、典型的ないじめっ子やいじめられっ子は存在せず、幅広い子どもが被害者にも加害者にもなり、入れ替わっています。一方、暴力を伴ういじめについては、加害被害共に一部の限られた子どもが繰り返しています。以上を踏まえた対応としては、「気づきつつ、見逃しやすい」暴力を伴ういじめについてはそれを見逃さず、警察等関係機関と連携することが肝要であり、「気づかずに、見過ごされやすい」暴力を伴わないいじめについては、未然防止が最重要となります。教師はささいなトラブルが深刻な事態に至らないような学級の風土づくりに努める必要があり、いじめに向かわせないよう学校が取り組むべき課題は、規律、学力、有用感である、とのことです。豊富な実証データに基づく講演から、聴衆はいじめの「正しい」理解と対応について多くを学ぶことができました。

● 第5回文学部（国文学科）講演会
「柳原白蓮とその時代ー愛を貫き自らの生を生きた歌人」
● 文芸評論家、元・東京女学館大学教授　尾形明子氏
● 11/28 長久手キャンパス

尾形明子先生は、近代日本の女性文学についての研究に長年携わり、女性作家たちの再評価に取り組んでいらっしゃいました。今回の講演会では、NHK連続テレビ小説で仲間由紀恵さんが演じ人気を博した、柳原白蓮の実人生についてお話しいただきました。

白蓮の名を世に知らしめたのは、九州の炭坑王の妻という恵まれた地位を捨て、7歳年下の青年と駆け落ちした、いわゆる白蓮事件（1921年）です。この事件は、一見すると裕福な女性の奔放な恋愛劇にみえるかもしれません。しかし、そのころ白蓮が詠んだ短歌からは、表面的には順風満帆ともみえる生活の裏側で、彼女がいかに孤独を深めていたのかがうかがえるといいます。そこに登場したのが、駆け落ちの相手となった宮崎龍介です。彼は学生時代から社会主義運動に携わってきた活動家で、まさに大正という新時代の潮流を体現したような人物でした。醜聞として語られがちな白蓮事件ですが、それは新しい時代を象徴する男性とともに自分の人生を生き直そうとする、白蓮の強い意志が生み出した成果でもあったのです。

講演会に参加した約100人の学生たちの多くが、白蓮の凛とした生き様に大きな感銘を受けていました。

● 第６回文学部（教育学科）講演会
「これからの学校教育の展望～生活科・総合的な学習の時間を中心に～」
● 浜松学院大学短期大学部
准教授　加藤智氏
● 12/11 長久手キャンパス

加藤智先生の講演は、自己紹介と生活科のクイズから始まり、先生ご自身が聴衆の所に行かれ、聴衆と対話されながら進められ、大変楽しい内容でした。加藤先生は、生活科と総合的な学習の時間の現状と課題について、「生活科は、具体的な活動や体験を通して自立への基礎を養うこと目標とし、小1プロブレム対策としても大切な役割を担う教科であるが、専門家が少なく、指導法が確立されたとは言い難い。総合的な学習の時間は、『探求的な学習』と『協同的な学習』が行われ、子どもたちから楽しい授業と評価されるが、教員からは準備が大変で必要ない授業と評価されている」と述べられました。しかし、これからの時代に求められる力は、自立した人間として多様な他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質や能力であり、「生活科」や「総合的な学習の時間」はこれらの力の育成に極めて重要であると指摘されました。聴衆は、加藤先生の巧みな話術に魅せられ、熱心にメモを取り、教員となった時に、子どもたちの「生きる力」を育てるためにどのような授業をすべきか、真剣に考える有意義な時間となりました。

● 交流文化学会「第2回研究大会」
● 第1部特別講演
「映画字幕屋の渡世奮闘記」
映画字幕翻訳者、
映画翻訳家協会会員　太田直子氏
第2部研究発表
● 12/20 星が丘キャンパス

12月20日、交流文化学部では昨年に引き続き第2回となる研究大会を開催しました。第1部として映画字幕翻訳者の太田直子氏をお招きし、特別講演会を行いました。これまで千本以上の映画作品に日本語字幕を付けてこられた氏に、「字幕翻訳の基本ルール」「字幕翻訳の心得」「字幕制作の工程」など、大変興味の湧く話をお聞きしました。また映画字幕翻訳者になった経緯もお伺いし、親近感も覚えました。これからは洋画を観るときは、せりふの原語と字幕の日本語の両方に関心が向くことでしょう。

第2部の研究発表では、卒論を書き終えたばかりの4年生を中心に31人の発表者が7つの会場に分かれ、各自のテーマで研究発表しました。研究テーマは、言語・教育・国際関係・社会・観光等々、交流文化学部にふさわしい多岐にわたるものでした。第1部の講演会を聴いた400人の学生がそのまま、各自関心のあるテーマを求めて7つの会場を巡りました。午後1時から5時までの長丁場でしたが、参加した学生たちにとっては大変有意義な時間であったことと思います。

講演会報告

中学校・高等学校

●PTA講演会
「流氷の伝言」
●動物写真家
小原玲氏
●11/12 センテナリーホール

11月12日、本校センテナリーホールで、動物写真家の小原玲氏による「流氷の伝言」と題する講演会が開かれました。小学校の教科書にもシロクマの写真や文章を書いていらっしゃる小原氏の講演を聞こうと、多くの保護者の方が参加しました。

小原氏は報道写真家出身で、天安門事件、湾岸戦争、ソマリアの飢餓などを取材し、米LIFE誌の「The Best of LIFE」に選ばれるなどの活躍をされていました。動物写真家に転向するきっかけとなったアザラシの写真にまつわるエピソードなど、普段では聞けない貴重なお話に、参加された保護者の方も相槌をうちながら、興味深そうに聞き入っていました。

副題にも「アザラシの赤ちゃんと地球温暖化」とあるように、現在の小原氏の大きな立脚点は環境保護にあります。それが荒唐無稽にならないのは、いつもそこに愛情のこもった動物の写真がいっしょにあるからなのでしょう。かけがえのない地球の環境と、そこで懸命に生きる小さな命の存在を感じる講演会でした。小原氏の写真集を持ってサインをお願いする方もおられ、多くの方に共感と満足とを与えることができたと確信しました。準備の段階からお手伝いいただいた役員の皆様にお礼を申し上げます。